

# 問いかけること

佐藤 真一

遠い記憶のなかに、一つの情景が浮かんでくる。共立講堂で、小学校の合唱コンクールが開かれていた。私たち、杉並区立西田小学校の五〇名の生徒たちは、『水車小屋の歌』をうたった。

小川の岸の／＼コットン／＼粉引き小屋の／＼コットン

水車はまわる／＼コットン／＼朝風のせて／＼コットン、

コットン。

私のパートは、「コットン」と合いの手を入れるだけ。歌詞の部分も歌いたかったと今でも思う。

「ト音記号ってなんだっけ？」と考え込むほど、私は音楽の知識に乏しい。けれども音楽は、私にとって喜びである。とりわけ心動かされたのは、中学三年生の時だった。遊びに出かけた友達の家で、ステレオから流れてくるモーツァルトの『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』に聴き入った。「こんなにも美しい世界があるのだ」。身の震えるような経験であった。さつそく、ブルーノ・ワルター指揮のドーナツ盤レコードを買ってきて、おもちゃのような電池式プレーヤーで繰り返し聴いた。

皆さんは、より深い音楽の喜びを経験してこの大学の門をくぐられたことであろう。音楽のさまざまな分野の勉強を通じて、その感動を是非とも深めていってほしい。そしてその感動は、きつと様々な「問いかけ」と結びついていることだろう。どのようにしたらよりよい演奏ができるだろうか。この作曲家はどんな時代にどのようなことを考えながら作品を生み出したのだろうか。音楽理論の面から分析すると、この曲はどんな特徴を備えているのだろうか。

私がこれまで携わってきた歴史研究においても、「問いかけ」はいつも身近にあった。私が大学に入学したのは、一九六六年である。当時、私の大学は一五〇日間にわたるストライキの只中にあつた。ベトナム戦争反対、学生会館の管理運営権を学生の手に、といったスローガンのもとに授業がボイコットされていたのである。バリケードの内側では、連日、クラス討論が繰り返された。古い時代の、しかもヨーロッパの歴史を学ぶことと、揺れ動く日本の現実の中で生きることとをどう関連づけたらよいのか。このことを、否応なく考えざるを得なかつた。大学の封鎖が解かれて以来、私はこのような問いを抱えて、しばしば大学の図書館に通つた。大学院に進むと、書庫に入ることが許可された。足音だけが響く書庫で、時には一〇〇年以上も前に書かれた本を開くこともあつた。革表紙からは茶色の粉がばらばらと落ちた。それらの書物は私の問いに対して、それぞれの仕方、示唆を与えてくれたのである。

こうした経験を通じて、伝統というものは誰にでも自明なものとしてそこに存在するものではなく、私たちが問いかけたとき、その問いの深さに応じてその姿を現すものではないか、と考えるようになった。深い感動からであれ、切実な現実的関心からであれ、問いかけるときに初めて、図書館の蔵書はその本来の輝きを示してくれるであろう。

充実した音楽図書館として定評のある国立音楽大学の図書館は、皆さんの勉学にとってかけがえのない場になるに違いない。楽譜やCD、DVDはもとより、多くの音楽書が皆さんの「問いかけ」を待っている。